

非僧非俗の實踐的意義

川 瀬 和 敬

一

『教行證文類』後序と稱されるところに、

主上臣下背^レ法違^シ義成^シ忿結^ツ怨因^ヲ茲眞宗興隆大祖源空法師并門徒數輩不^レ考^ニ罪科^ヲ狠坐^ツ死罪^ニ或改^メ僧儀^ヲ賜^テ姓名^ニ處^メ遠流^ニ予其一也爾者已非^ス僧非^ハ俗是^レ故以^テ禿字^ヲ爲^ス姓空師并弟子等坐^ツ諸方邊州^ニ經^テ五年居^リ諸^ノ

と、承元元年の念佛停止の法難が記述されてある。實は元久二年十月興福寺奏達が行われ、その奏達の功を奏したのが、承元元年二月であるといわれる。開山聖人の御生涯中、重要な轉機を、その事件の時より約二十年も程經て、記述されたものであろうが、その時の全身心に響いたものを深く内に包み、しかも冷靜に事態を凝視して、一々の事實を明記し、偶然の中に必然を讀みこみ、自己の位置とその使命を適確に把握されたのである。

聖道門の僧達が、時の權力者と結托して、理不盡にまことの佛法を彈壓し、高く法幢を掲げて法義に立脚するものとおもいつゝ、本願眞宗の時機相應の教法なるに對する誤解のため、彼等こそ法義に違背し、敵とすべからざる者を敵視し、成^シ忿結怨^ヲ、忿を成すべからざるに構えて忿を成し、怨を結ぶべからざるに殊更に怨を結んで、念佛停止の令

となり、師弟もろともに罪科を負うことゝなつた。實は憤つてゐるのは、權力者、彈壓者の側であつて、聖人は末法の時、五濁の機を見るが故に、個人の運命などいうものをすでに超えて、問題のありかを洞察し、熾然として燃えつつ、内はいかにも靜かであり、佛法の權威に立つが故に、強がつて權力者に抵抗する必要を認めず、はからずも、身にふりかゝりたる地上の災厄流罪の宣告を、怒り心を起さず、怨み心にかきみだされることなく、受容の過程に無用の抵抗がなかつた。行證久しく廢れたる聖道の諸教は、救済の教法としての權威を喪失したる故に、俗に媚び、權力と合體せるものであることを本質的に意識しておられたのであらう。これほどの危機に直面したるにも拘らず、動搖なく堪えてゆかれたのは、この轉變のなかに證據だてられている未來に對する新しい信念のゆるぎなさであつた。

二

國家の支配權力により、度牒剝奪、僧の儀を改めて、公認の僧位を失い、還俗、流人とならしめられたのであるが、叡山離脱より、この時まで六年間、聖人自身の僧の感知は、如何なる位態であつたものか。無戒名字の比丘の意識は、いつ頃から生じたものであつたか。叡山離脱の際、受けた戒を返上して、捨戒されたものとみれば、僧の必須條件たる戒を捨てることによつて、僧にあらざる僧となられたものであるか。しかも戒を雜行として棄て、本願に歸し念佛を修することによつて、戒體清淨を得しめられ、以後他律的な戒律を顧みる要を認められなかつたものであるかどうか。淨肉の文或は殺盜婬妄語綺語惡口兩舌貪瞋癡の十惡の文が、いつの頃にか別選ばれてゐるのは、他に與えたというよりは、自誠のための深いつつしみを示すものではなかつたか。

聖人三十二才、元久元年十一月七日、法然上人以下門弟百九十人連署しての「七箇條起請文」が製作され、延暦寺の非難を宥めんとされたが、そこに聖人が、僧^そ緯空と自署されてあるという。（京都の二尊院に當時の起請文がある

というが、『西方指南抄』中末のはじめにこの起請文をのせ、僧綽空でなく善信とあつて、「已上二百餘人連署了」と結ばれてある。しかもその「起請文」には「一、念佛門に於て戒行無しと號して、専ら婬酒食肉を勧め、適ま律儀を守る者を難行人と名ずく、彌陀の本願をたのむもの、説いて造惡を恐るゝことなかれということを停止すべき事」と、あるよりみれば、この前後に於ては、食肉帶妻のことはなかつたとみるべきではないか。だから承元の法難に際し、その理不盡な斷罪に對して、「罪科を考えずみだりかわしく」と、難詰されたのではなかつたか。或は逆に自律自律の新しき僧道として、食肉帶妻にすゝまれ、そのために門徒數輩の中に連引されたことを難詰されたのであつたか。

かく雲霞に覆れつゝも、事實として法然上人以下流死罪の斷は下つた。師弟流離、從つて、吉水教團の解散という危機に直面することによつて、却つてこれを轉機として肯い、僧が教法を行證せず、現世的勢力にのみ奉仕し、自己否定なき鬭爭と自己喪失の墮落に終始せる現實を視、教法社會に謙讓に責任を盡していない現實を痛みこそすれ、流罪の處罰を少しも恐るゝところなく、よく受けて耐え忍び、自己の命懸けで求め値遇した教法の故に疎外されるという運命を、自己の本質を顯わならしめる、宗教的決斷の内的行爲に轉じ、精神の自覺を完結し、『教行證文類』製作の事緣として頂かれたのであつた。正像末の史觀を通して、歴史の判決として、今や聖道の諸教は、その教説が正しいにも拘らず、像末法滅の時機に非ず、歴史から沒落したとの知見に立てば、危機を突破して危機を轉機たらしめ、却つてこの法難は單なる外部事件ではなく、佛法的事實として、眞宗佛法が萬人に公開さるゝ機緣と受取ることが出来るのである。

三

さて重ねて、遠流に際し、僧の儀を改めるといふ、その僧の儀の内容は何を指すのであろうか。先輩によれば、僧の儀とは國家權力に對する絕對服從、持戒による祈願の有効な遂行、と規定されているが、北嶺の寺門を離脱した専修念佛者も、この規定の中にあつたのであろうか。世俗的權力を有し、世俗的機構によつて維持されている南都北嶺の、俗世におとらぬ世俗俗流に失望した者にとつて、僧より追放され、僧儀を脱せしめられたことは、むしろ望まじき事態といふべきではなかつたのではないか。さきに自らの意志を以て、虚偽と名利の伽藍より去り、今又僧位を脱せしめらるゝこと、むしろ本懷と稱すべきでないか。いや併し乍ら僧實がなければ佛法は成立しない。

『化身土文類』に

穢惡濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀をそしる、今の時の道俗己が分を思量せよ

時は五濁惡世の末法、救いがたき凡愚の時代、そしる者もそしらるゝ者も、末法のこの現實の自己の分際を凝視せよ、と呼びかけられてある。世俗を捨てゝ出家して入山した者が、求道闍法の爲には、再び山を捨てねばならぬといふ、菩提心不毛の末法の時に於て、深く己れの分限に立ちかえらねばならぬ。僧尼はその生死超脱の立場より、生死流轉の世俗社會を鋭く批判し、方向を誤らしめざるよう淨化するのが、當然の本命であるが、今や逆に自己喪失の俗流より、僧尼の威儀の墮落がそしられているのは、時の末法を顧みざる故に、空轉に過ぎないものでないか。己が分を思量し、自己批判に立たなければ、批判として當を得たものでない。現實を傍觀するのではなく、現實となつて末代の旨際に直面するのではない。歸依なくしてなされたる批判は妄斷に外ならない。

己が分を思量するならば、如來の遺弟としては悲泣せざるを得ぬ深い懺悔を通して、如來の教法に應ぜねばならない。そしる社會の聲、民衆の聲に直ちに應ぜねばならぬということはない。

『化身土文類』（後序の直前）に、天台大師の「三寶に歸依せよ、三寶に歸依する者は外道に歸依するな」、又慈雲

大師の「神祇祭祀の法は、印度でも支那でも、世俗中のもので、眞實の立場より云えば、世俗を誘惑する權力に外ならぬ」との語が引かれてあるのは、俗の欲するものは何であり、眞實の歸依を失つた僧や俗が鬼神に仕えている現状が語られてあり、時の聖道門の僧團は、力をたのみとし、世俗の本質がそのまゝ、こゝに働くことが知られるのである。僧が身心的に、僧を完うすることが出來ず、鬼神の如き、人間の自己表現そのもの、人間の鬼性の同一平面上の投影に過ぎないものを、世俗に神聖視せしめようとする、俗的偽性が、鋭く衝かれ、魔道として痛烈に否定し去られたのである。

無明的存在として、覺道を障え眠らしむる俗性は、その顛倒の妄見をひるがえして、菩提心の本來性にめざめねばならない。本來というが、本からあつたものでなく、本から來ておる廻向性として、日常の非本來性を解放するはたらきをもつ。日常の世俗社會をして、覺道の教法社會にめざめしめねばならない。

自己確立のためには、世より全面解放されねばならぬ。なにもものかの奴隸であることから解放されねばならぬ。鬼神が人間權力に依據盲従するを俗の本性とする。かゝる世をいとうということがなければ、世のゆがみをみることが出來ない。世をいとわなければ、異變動亂に際して、必ず自己に迷惑する。世をいとうことは、世を捨てることではなく、俗性のひるがえりをいふことでなければならぬ。世俗を離れたことは、現世的な力の一切を持たない意味で、如何にも無力に見えるが、世俗社會を直接に動かす力は無くとも、教法を頂くものゝあるところ、僧伽は必ず存在し、北越の涯であろうとも、決して孤立したものでなく、現世における力あるものゝ争いを、いつかは終着せしめずむばやまぬという、ゆるぎなき決意が、内面に動いていると見たい。

四

正像の二時は終つたが、すでにして教法はある、教法に歸すれば、求めずしてひろやかにゆたかなる僧伽が與えられる。本願の念佛によりて結合された人間の協同體が、末法の僧伽であり、原型の僧伽も末法的に變貌されてはいるが、僧伽を離れて教法のみがあり得るということはない。佛法僧の三寶といわれるのに、僧伽をぬきにして、教法のみの永遠性の確信を主張するのは觀念的であつて、往還廻向的でない。他面世俗社會の人間集團に類同する組織集團が僧伽なのではない。「組織³に於て新しき修道院の協同體を結成し、科學技術を取入れた生産自給體制と修道即傳道の宗教活動とを綜合する宗教的協同村落の發足が必要なのではないか」と指向さるゝ方向に、僧伽は求めてゆくべきではなくして、すでに與えられている僧伽を發見することである。

はるかにひろやかなる僧伽が、自己の背景にはたらき、自己を呼びさましておればこそ、僧という形を停止せしめられ、未見の北越遠流に所遇されつゝも、人間の孤獨を超えることが出來た。恩師源空法師並に法兄聖覺法印を除いて、群居する僧群の中に、教法を領納する僧が始どいない。こゝにあつて僧位を脱せしめらるゝことは、むしろ望むべきではないか。個人としての僧の名が消えて、末法の僧伽に責任を荷負する僧伽の人間としての歴史的確信を生じたのでなかつたか。見えざる僧伽が、見えざるものとして見えていたのでなければ、當時としてかゝる異變に際會して、今一度の勇氣をふるい起すことは出來なかつたであらう。

當時³の法制では、僧を罰するには、僧たることをやめて還俗させ、社會人にかえて法律を適用したといわれる通り、俗人となつた聖人が、僧を去つて俗となつたといわずして、僧に非ずと同時に、同じ強さで俗に非ずといわれたのは何と含みの多い表現であらう。俗に非ずとは、流人となつた聖人にとつて、もはや公民權を奪われて在俗の人たることも出來ないという消極的意味に止るものでなく、日常安穩に坐する俗に再びかえることは出來ない。俗に存在根據をおくことは出來ない。自己を喪失した日常的な人間にかえることが出來ないのが、求道の間、修道の間と

しての自覺である。

「僧に非ず俗に非ず」という言葉は、この時代には一定の意味があり、叡山の學問の仕方や俗臭にあきたらず、聖や沙彌の乞食僧として、道心者の生き方が示されたといわれるが、聖人のこの語の使用は、かゝる遁世や隱逸とは全く風格を異にした、別異の感知があつたものとせねばならぬ。自己の體驗にもとづいて、この語が從來知られなかつた廣くして深い領域をもたしめられたのではあるまいか。もとより一應は生活形態を示されたものであつたとしても、實は形を問題にしないところに淨土眞宗の僧伽の本質があるとうかゞうことが出来る。内面にゆたかな僧伽が見えていたから、自己のあるべき身分を明瞭にして、念佛停止の迫害を受けて立ち、その枉げることの出来ない、積極的精神を非を以て表現したのである。後年に至つて、念佛者と佛法者の語を鋭く對比し、佛法者が獅子身中の虫として、念佛者を破壊する、と示されるのであるが、こゝに於ても僧（僧伽）を破壊するものは、佛法外の力によるのではなくして、佛法第一義を口に稱し、行信を缺く見せかけの佛法者に外ならぬことが痛まれ、その場合佛法者に對する念佛者を、高次な眞實者として、新鮮な意味が籠められているのであらう。

實踐道として身心を擧げてこれを行ずることの困難なる、非僧非俗の宣言によりて、僧俗を超えた、高貴なる體現者として立ち、僧の俗性、俗の權力をあこがるゝ性、これらに對する強い反俗精神を堅持する。聖道の諸僧の中には、明惠の如き佛法的嚴肅さに於て、人間の極限にまで達したかとおもわれる聖僧もたしかにあつたのであるが、その理想主義的菩提心主義の故に、願力廻向の信心こそ大菩提心であつて、自力の菩提心はむしろ不要である、との本願の論理が、いかにするも理解出来なかつた。それは現在の有の連續として未來の果報を考える、過去維持の同一性論理の立場を離れることが出来なかつたためである。俗はまた頑固にこの立場に執意し、本願による變質轉換の論理を聞いても、これを同一性論理の武器を以て、もちかえて受取る習性もち、安易な満足感と安逸に頹落する。これには

どこまでも否定を深めて、無求道者をして、そこに止るべからざるを指向せねばならぬ。信心即菩提心に照らして、無求道の根深い俗性のひるがえりをいのり続けたのであつて、一點も俗と妥協するところはなかつた。

五

流罪に際會し、俗の姓名を賜りつゝ、それは殊更に記述するを止め、自ら進んで自己の名告りとして禿の字を姓とされたのは、僧よりの強制的な追放によりて變質轉換され、心出家の内面的なる、自己の僧道の確立であり、しかも「この人を見よ」「たくましき親鸞」などというが如き、威張つて肩をいからしたものでは決してなく、僧の徳なくして僧形を離れ得ざる最低の僧として、自己を適確におさえたところにある。禿頭であるために、剃髮の僧に似たるも、眞實の僧とは似てもつかぬにせ僧であり、汝の姿を恥じよという聲を聞くのみであつて、一點のほこりもあり得ない。非僧の表白と同時に、にせ僧の自稱あることの矛盾を感じるよりも、却つて底下の自己の表白が、限りなき感動を湧き起して止まない。この時以來愚禿と稱されたようであるが、こゝには豫想されつゝ、熟字されることはなかつた。禿||外相（非僧非俗||外俗）、愚||安心||内僧、との先輩の身心にかけての指示のあることはまことにかたじけない。身にかけての實踐は深い自覺を呼び起してゆく。

聖人の内外對應の用語例に準據すれば、外僧内俗の表明を見るであらうが、併し直ちに内外翻轉して、外俗内僧と仰がずにおれぬところに、われらの立場がある。善導の不得外現賢善精進之相内懷虛假の文を、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虛假を懷けばなり、と破格に讀み下して、善導の眞意に應え、『愚禿鈔』に「賢者の信を聞き、愚禿が心を顯わす、賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」と、賢愚内外の對照により、自己批判に立てば偽であり假であることが、徹底して示される。外賢のすがたを見せようとする自

己に、賢善精進のすがたを外に現わすな、と呼びかけるのは、内なる愚と假とを知るが故である。その外賢の根據は内愚にあることを知ったところに、内愚は内僧として光る。その内僧は個人としての僧というよりも、個の内奥に徹し、超個としてむしろ外に僧伽を意味し、無價值無意義な存在が僧伽の一員に加えられ、その僧伽の實踐が『教行證文類』の御製作となつたとかげえないであらうか。(五月二十六日、發表の上に、少量の筆を加えたことをおこわりたい。又數箇所にて、生桑完明師の指示を仰いだ、その眞意を逸脱しておりはせぬかと恐れる次第である)

註1 大無量壽經に忿成怨結とある語を用いつつ、成忿結怨と轉ぜられてあるところ、留意すべきである。

2 二尊院にある起請文の僧綽空の文字は、原字がいつか誰人かの手によつて消され、その上に作爲を以て、僧綽空と書き改められているという事実は、何を物語るのであらうか。

3 二葉憲香氏『親鸞の人間像』『親鸞の社會的實踐』

4 田邊元博士『キリスト教の辯證』四七九頁

5 藤島達朗氏『惠信尼公』